

厚生労働省第185回市町村職員を対象とするセミナー
2026年6月12日



地域づくりの土台として機能する ひきこもり支援の市町村プラットフォーム



岩田光宏 m.iwata@osaka-ue.ac.jp
公認心理師・臨床心理士
(大阪経済大学人間科学部／こころの健康えとせとら)



自治体職員
ひきこもり地域支援センター



任意団体
地域の居場所づくり

孤独・孤立対策としての**地域の居場所づくり**

不登校・ひきこもり支援の居場所づくり，家族会，ボードゲームを活用した交流，サポーター養成講座 など



こころの健康 えとせとら

ひきこもり・不登校などによって生じる孤独・孤立状態からつながることができる地域づくりを目指しています。



<https://kokoroetc.org/>

ホーム お知らせ 活動情報 コラボ企画 各種リンク お問い合わせ

地域の居場所
大隅西サイコロ倶楽部
おおすすめしさいころくわが
大隅西サイコロ倶楽部

このサカイの片隅に
このサカイの片隅に

スペース正雀
スペース正雀

ボードゲームスペース東田辺
ボードゲームスペース東田辺

阪南市 ひきこもり家族交流会
まんまの会
まんまの会 -阪南市ひきこもり家族等の交流会-

市町村プラットフォームを土台とした地域づくり

阪南市「草の根ネット」の取り組み

(参考) 地域づくりの土台として機能するひきこもり支援の市町村プラットフォーム：阪南市「草の根ネット」による居場所づくりの展開から学ぶ
岩田光宏 大阪経大論集 75(6) 40-60. 2025.

ひきこもり支援の「市町村プラットフォーム」とは

- 官民の枠をこえて多様な関係者が連携・協働する支援のネットワーク
- すべての市町村に設置が求められている（厚生労働省地域福祉課長通知，2020）
- 市町村プラットフォームでは何をするのか？
 - ・さまざまな関係者が集い「ひきこもり支援」という課題の理解を深める
 - ・地域の実情に応じた支援体制を構築する
 - ・相談支援の関係者が具体的に連携する場とする
 - ・こうした取り組みへの「気運を醸成」する など…



何のために
プラットフォームを
創るのか？

大阪府阪南市の市町村プラットフォーム【草の根ネット】

地域の居場所づくりを創出する「地域づくり」の土台としての機能

阪南市における市町村プラットフォームの概要

ひきこもり・地域の居場所づくり支援 草の根ネットワーク 【草の根ネット】

- 市役所にて隔月（年6回）・90分間の会議
- 参加者：市役所の依頼によって出務する関係機関の担当者のほか
当日に予約なしで誰でも参加することができる
ひきこもり状態の本人および家族、地域住民、市外の人も参加できる
- 主な内容：近況報告を中心とした交流（出会い・関係作りの場。お互いの活動状況を報告し、その意義を確認し合う場）
困った事例を取り上げて専門的な解決案を検討するような話し合いはしていない
具体的な取り組みは分科会に分かれて話し合う

阪南市における市町村プラットフォーム創設の経緯と展開

- 2018年度～ 阪南市立尾崎**公民館**（生涯学習）にて「**ひきこもり支援の連続講座**」を開始。誰でも無料で参加できる ⇒地域住民など多様な主体が参加
- 2019年度～ 講座の受講者を中心に、ひきこもりの市町村プラットフォーム【**草の根ネット**】を創設
- 2021年度～ 草の根ネットに分科会（活動体）を立ち上げ
- 2022年度～ 上記講座の受講者のフォローアップの場として「ひきこもり家族交流会」を開始 ⇒2023年度に「**家族会**」が発足【**まんまの会**】
- 2024年度～ イベント部会が中心になりひきこもり啓発イベントとして**音楽フェス**を開始【**泉州トリガーフェス**】

まだ受講していない？ 阪南市と言えば 尾崎公民館の
「ひきこもり支援連続講座」
(毎年1月～3月頃の開催)

ひきこもり・地域の居場所づくり支援
草の根ネットワーク

定例会は
隔月開催

だれも否定しない、
”そのまんま”でいい会



まんまの会



SENSYU 泉州トリガーフェス
Trigger FES

引きこもり当事者が“きっかけ”を見つけるための音楽フェス

市町村プラットフォームを土台として居場所づくりが広がる

公民館によるひきこもり講座
(2025年度)

みんなで創ろう共生のまち！

ひきこもり支援 居場所づくりサポーター 養成講座

2026年

1.24[±] 開講(全4回)

阪南市立尾崎公民館

ひきこもり支援と居場所づくりについて楽しく学ぶ講座です。受講後、希望者には「ひきこもり支援・居場所づくりサポーター」として登録していただき、ひきこもり支援や居場所づくりの活動にご協力いただきます。



#1

1月24日（土）

13：00～15：00

居場所づくりワークショップ

—あなたの知らないボードゲームの世界—

ひきこもりの居場所での交流でよく活用されているのは、世界中で創作されているさまざまなボードゲームです。ボードゲームを通じた交流を楽しみながら、居場所における出会いのプロセスを体験してみましょう。大学生やひきこもり経験者などのサポーターが参加してゲームの進行を補助します。

講師：岩田 光宏

（大阪経済大学人間科学部准教授／こころの健康えとせとら）

協力：サポーターのみなさま

#2

2月14日（土）

13：00～15：00

ひきこもり経験者の体験談から学ぶ

—障害の社会モデルについて—

ひきこもりの背景には発達障害が多いと言われています。障害について社会モデルの視点から学び、居場所づくりに求められる配慮について一緒に考えましょう。ひきこもり経験者から体験談を話していただきます。

講師：米澤 宙

（こころの健康えとせとら公認心理師）

ゲスト：ひきこもり経験者の方

#3

2月28日（土）

13：00～15：00

さまざまな家族関係について考える

—ひきこもり家族会の知恵から学ぶ—

社会から孤立してひきこもり状態になってしまうと、家族関係から受ける影響が大きくなります。親子関係だけでなく、夫婦関係やきょうだい関係など、さまざまな家族関係について一緒に考えましょう。ひきこもり家族会の方が参加して、交流のきっかけを創ります。

コーディネーター：

まんまの会（阪南市ひきこもり家族会）

#4

3月21日（土）

13：00～15：00

安心して過ごせる居場所のための対話実践

—リフレクティングを体験してみよう—

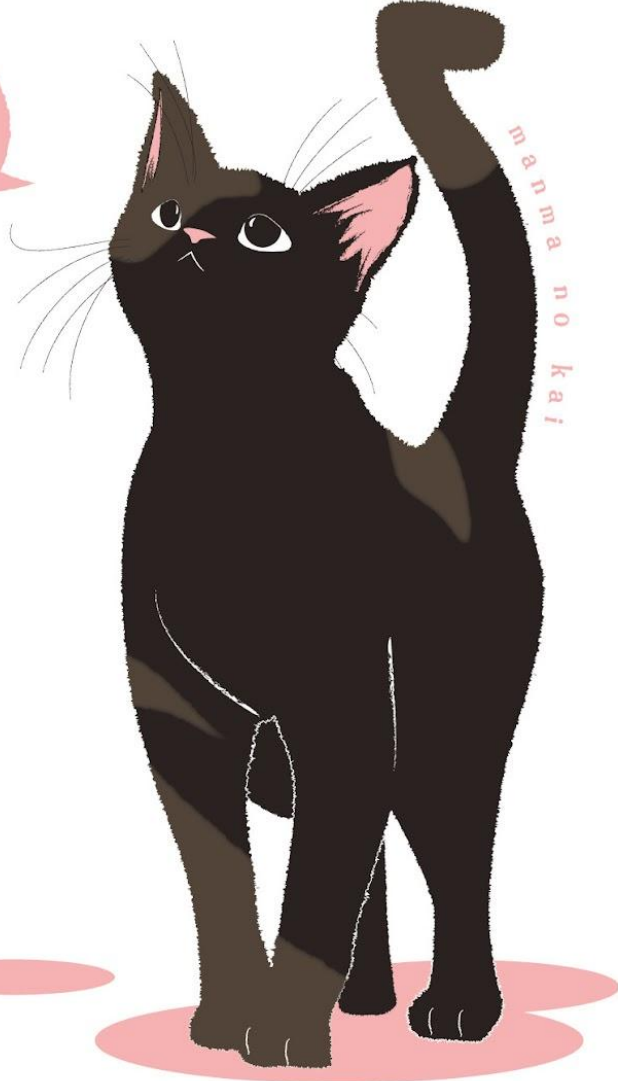
居場所が安心して過ごせる場になるには、対話実践の方法が役に立ちます。近年注目されているリフレクティングという方法を体験してみましよう。最後に修了式と、今後のサポーター活動についてご案内します。

講師：岩田 光宏

（大阪経済大学人間科学部准教授／こころの健康えとせとら）

定例会は
隔月開催

だれも否定しない、
”そのまんま”でいい会



まんまの会

「まんまの会」は不登校やひきこもりなど社会とのつながりが閉ざされ孤独・孤立で苦しんでいる人を支える家族を中心とした交流会です。

ひきこもりでも否定されずに「そのまんまでいい」と思える社会を目指して居場所づくりを行っています。

定例会ではお互いの近況や体験を伝え合って交流しています。関心のある方はどなたでも無料でご参加いただけます。ぜひお越しください。

開催日：概ね第4土曜日の午後（2か月に1回）

※最新の日時は右の2次元コードでご確認ください。

場 所：阪南市市民活動センター「夢プラザ」

（阪南市尾崎町1丁目18-15 阪南市地域交流館）

※南海本線 尾崎駅から徒歩5分

問合せ：kokoroetc2020@gmail.com



音楽フェス 【泉州トリガーフェス】



第2回 泉州トリガーフェス



SENSYU Trigger FES

引きこもり当事者が
“きっかけ”を見つけるための音楽フェス



第1回目のイベントの様子



- **引きこもり当事者のみなさんの何かの“きっかけ”になってほしい**
そんな思いから立ち上がったプロジェクトです
- 泉州Trigger(トリガー)フェスは、引きこもりの現状に対する理解を深めていただくこと、そしてイベントを通して当事者やその家族が地域の方々や繋がり、何かをする「きっかけ(トリガー)」を見つけていただくことを目的としています。
- **年寄寄付金** 泉州Triggerフェスの活動は2024年度日本財団年寄寄付金の助成を受けて運営しております。

2025. **3.8** 土
13:30~20:30
開演30分前に開場します

阪南市サラダホール(小ホール)
〒599-0201大阪府阪南市尾崎町35-3

Time schedule 開演時間中、会場出入り自由

13:30	オープニングセレモニー
14:00	専門家によるパネルディスカッション
15:00	ライブ演奏・ステージパフォーマンス①
16:30	当日キャンセル・当日飛び込みOK! 枠
18:20	ライブ演奏・ステージパフォーマンス②
20:20	クロージングセレモニー

※タイムスケジュールは状況により予告なく変更となる場合がございます。

ドタキャンOK! ステージパフォーマンス枠 出演者募集中! 詳しくはチラシ内面へ▶

入場
無料

開演時間中
会場出入り自由

第3回 泉州トリガーフェス



SENSYU Trigger FES

引きこもり当事者が
“きっかけ”を見つけるための音楽フェス

2025 **11.22** 土
13:30~19:30
開演30分前に開場します

阪南市サラダホール(小ホール)
〒599-0201大阪府阪南市尾崎町35-3

引きこもり当事者のみなさんの何かの“きっかけ”になってほしい
そんな思いから立ち上がったプロジェクトです

泉州Trigger(トリガー)フェスは、引きこもりの現状に対する理解を深めていただくこと、そしてイベントを通して当事者やその家族が地域の方々や繋がり、何かをする「きっかけ(トリガー)」を見つけていただくことを目的としています。

このイベントをきっかけに、「何かやってみようかな」と思っていただけで十分です。
それぞれのタイミングで、一歩を踏み出すきっかけになればと願い、開催しています。



第2回泉州Triggerフェスの様子

ドタキャンOK! ステージパフォーマンス枠 出演者募集中! 詳しくはチラシ内面へ▶



SENSYU 泉州トリガーフェス
Trigger FES

引きこもり当事者が“きっかけ”を見つけるための音楽フェス



第3回フェス（2025年11月22日開催）の様子

ABCテレビニュース（2025年12月）

生きてていい。引きこもり経験者が音楽で伝えた“命のメッセージ”とは
ひきこもりの人たちの「きっかけ」に・・・

<https://youtu.be/hiC2QVJeuOQ?si=PrjLQlq4BEkgs8Rb>

「草の根ネット」から広がる人と人とのつながり

1. 新しい年度の講座の受講者が、市町村プラットフォームにも参加した。
2. 市町村プラットフォームの参加者が、家族の立場として家族会に参加した。
3. 居場所部会で見学した地域活動（居場所カフェ）の開催者が、講座にゲスト講師として参加した。その後、市町村プラットフォームにも参加した。
4. 家族会の活動として、居場所部会で見学した地域の居場所カフェに行った。
5. イベント部会が地域の祭に出店した際に、家族会のメンバーが協力参加した。
6. 講座の受講者が家族会に参加。その後、市町村プラットフォームにも参加。さらにイベント部会が主体となって企画する音楽イベントに参加した。

「誰でも参加できるプラットフォーム」が多様な主体が地域づくりに参加する土台になった

ひきこもり支援における地域づくりの意義

クラスメイトからいじわるされて人間不信になってしまった小学校5年生の花子さん。花子さんの母親は、花子さんのこころを癒すために、花子さんと会ってくれるカウンセラーを探すことにしました。



花子さんに合うと思うカウンセラーは？

A：50歳男性、ベテラン心理師

B：25歳男性、若手心理師（T大卒）

C：50歳女性、近所のおばちゃん

D：25歳女性、若手心理師



専門的な技術で
治療する

問題を軸とした関わり
一方的



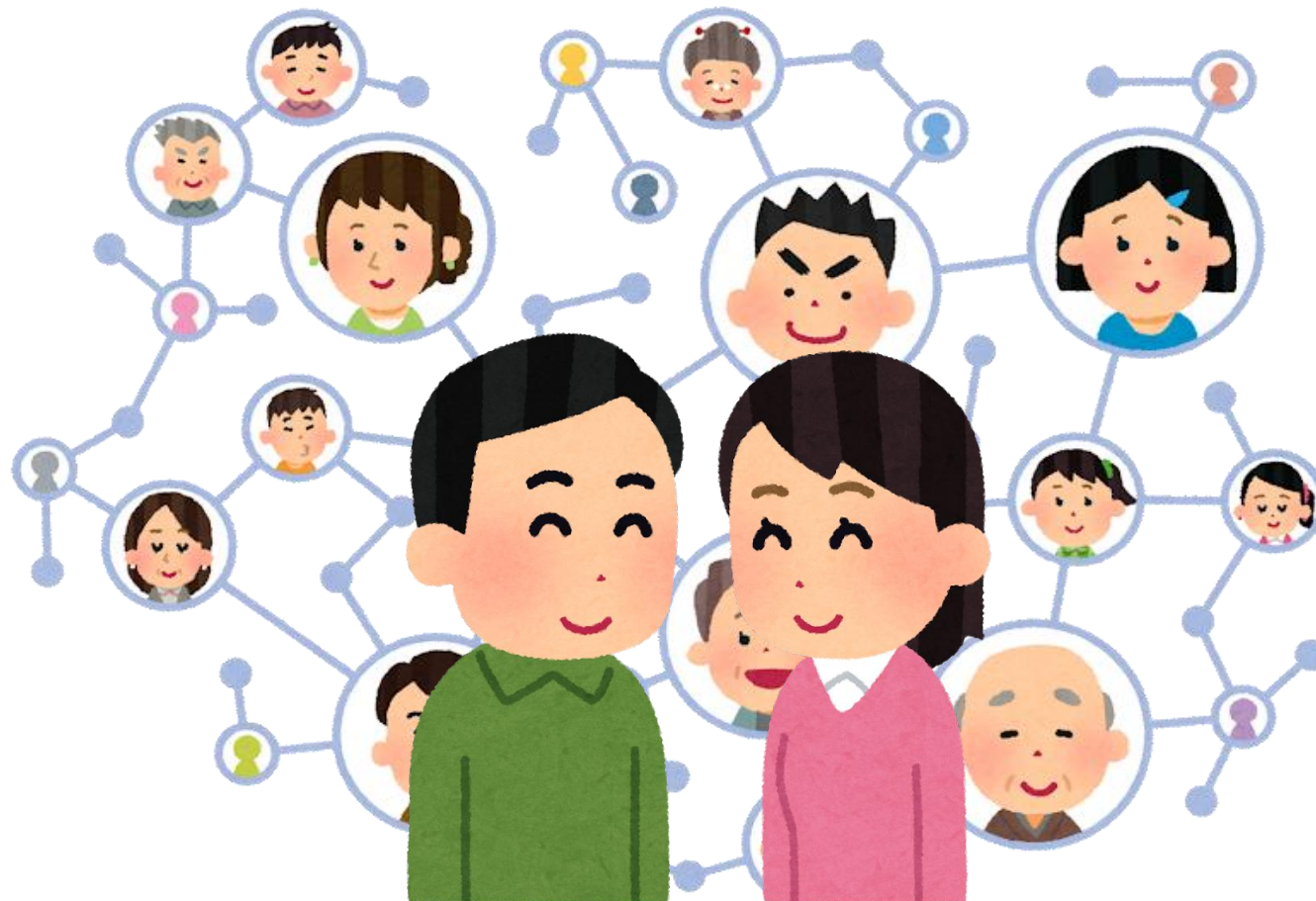
人と人との関係によって
ケアが生じる

問題を軸としない関わり
相互的



専門的な技術で
治療する

できるだけ時間をかけずに
解決する (図)



人と人との関係によって
ケアが生じる

できるだけ長く
つきあいを続ける (地)



「社会モデル」によるひきこもり支援を

➤ 医学モデル（個人モデル）の視点

個人のなかにある「問題」に原因・理由を求めて、個人を変えることで解決をめざす

治療すべき本人の「病気」とは？
訓練すべき本人の「苦手なこと」は？



治療・支援によって苦しみが軽減
社会参加（就労等）によって自立

➤ 社会モデルの視点

その人とその人を取り巻く環境・社会との関係性上に「問題」があり、環境・社会の調整によってその「問題」を改善する

その人に合った環境とは？
その人に提供すべき配慮とは？

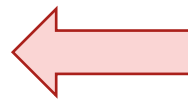


安心して過ごせるようになる
他者との「つながり」が増える
(結果的に就労などの社会参加に至る場合も)

本人・家族

社会

孤独・孤立



排除

包摂

inclusion

本人・家族が安心して過ごせる時間・
安心して繋がることのできる人・機会・場所を
社会の側が提供する



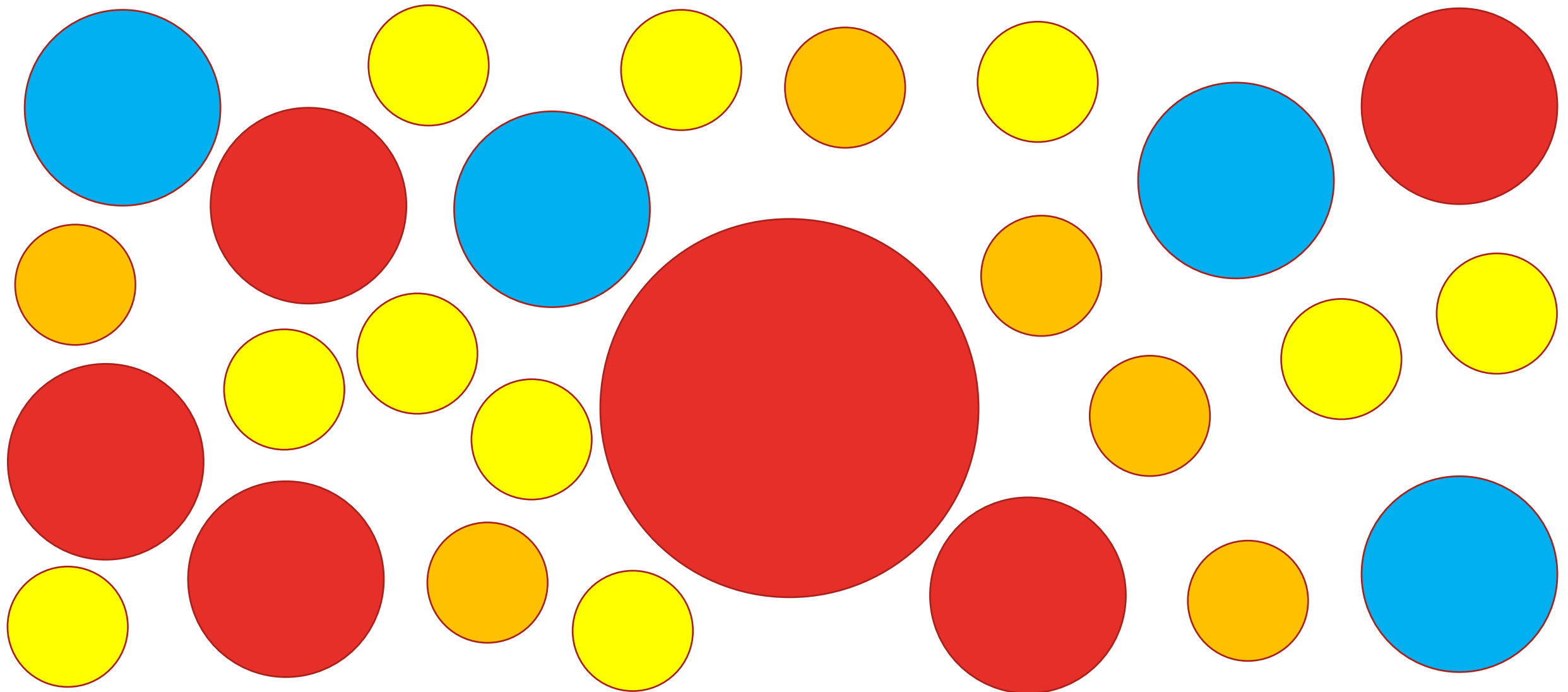
大きな「ハコ」をひとつ作る

ひきこもりの人はここに来て！



入れない人が出てしまう

がんばって入りなさい→さらに孤立



さまざまなタイプの
「人・機会・場所」がある



誰かに・どこかに
つながりやすい状況

教育機会確保法

2017年 施行

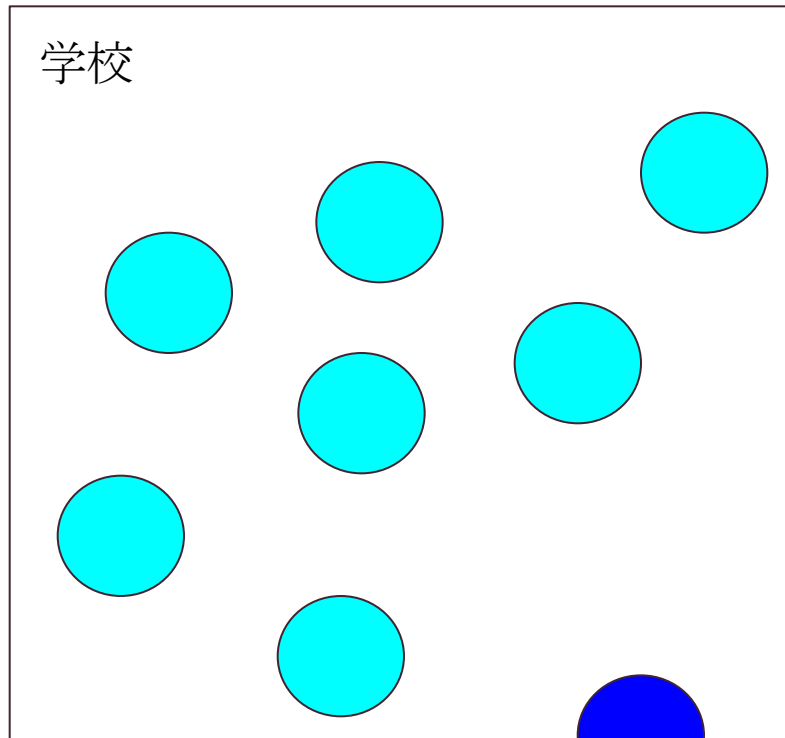
義務教育の段階における普通教育に相当する教育の機会の確保等に関する法律

(基本的な考え方)

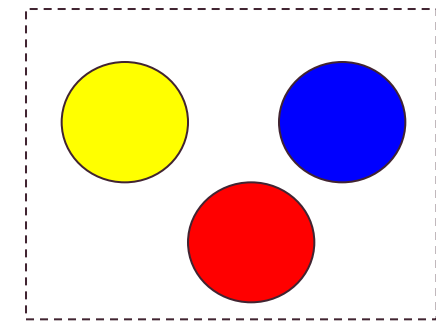
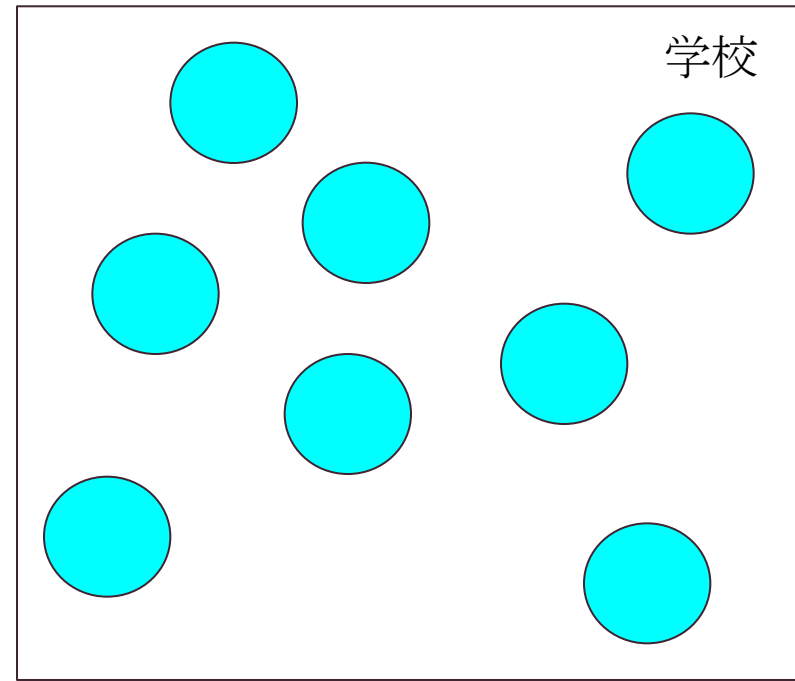
- ▶ 不登校は取り巻く**環境によっては**，どの児童生徒にも起こり得るものとして捉える
- ▶ 不登校というだけで**問題行動であると受け取られないよう**配慮する
- ▶ 不登校児童生徒への支援は，当該児童生徒の意思を十分に尊重しつつ行う
- ▶ 当該児童生徒や保護者を追い詰めることのないよう配慮する

休養の必要性や**学校以外の場**の重要性が認められた
(フリースクールや居場所など)

ただし、こうした発想に要注意！

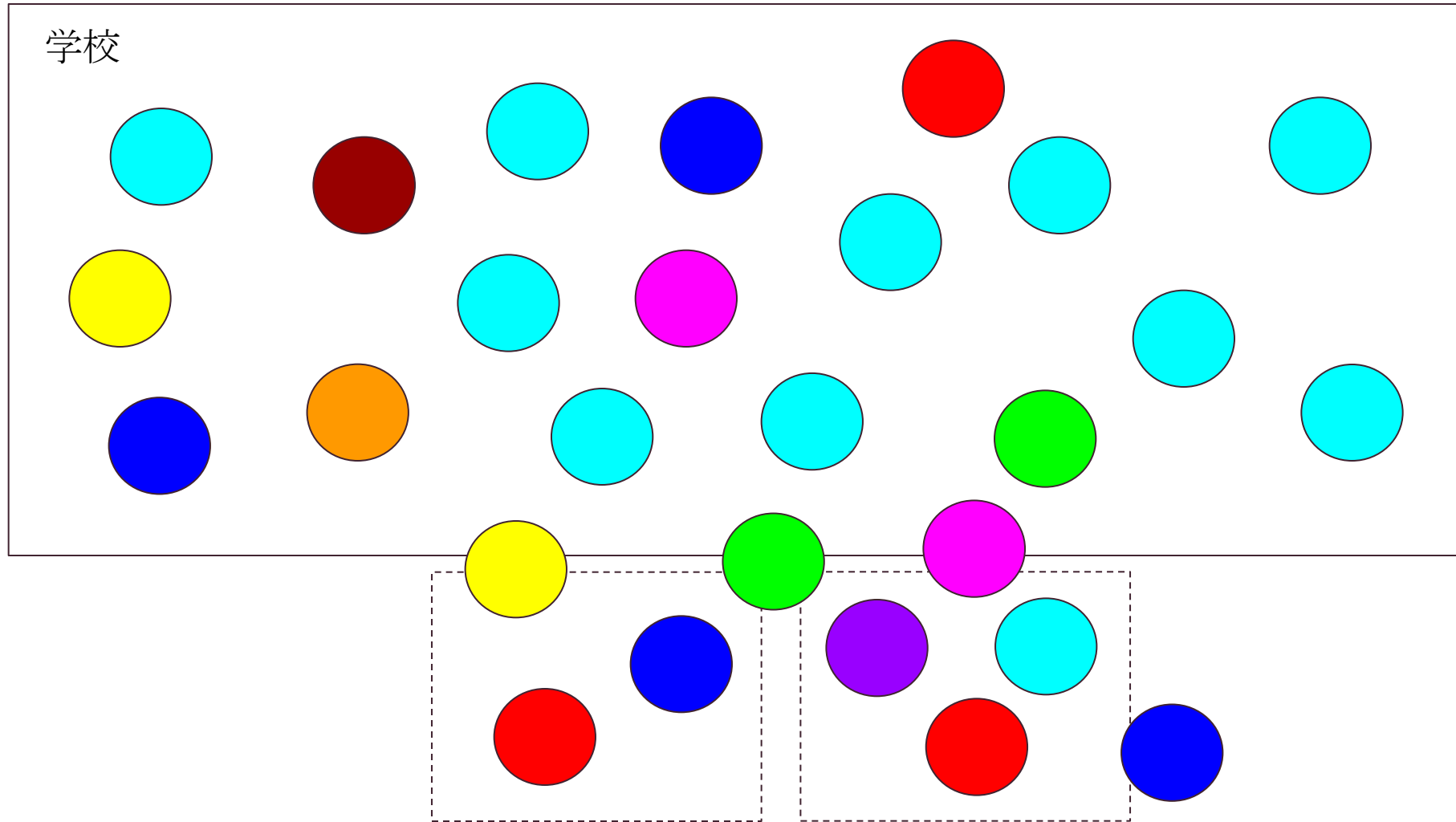


不登校

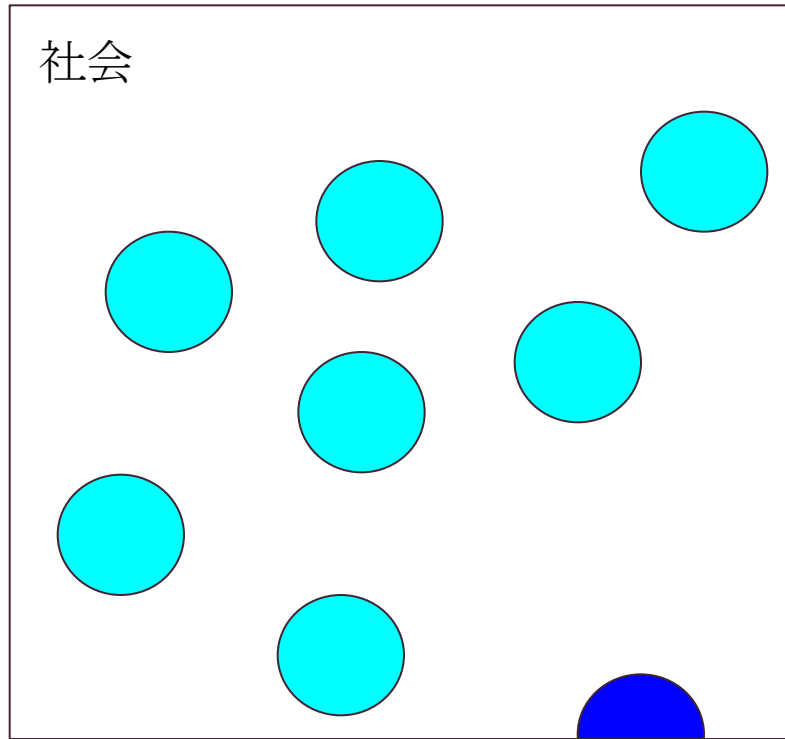


教育の機会を確保

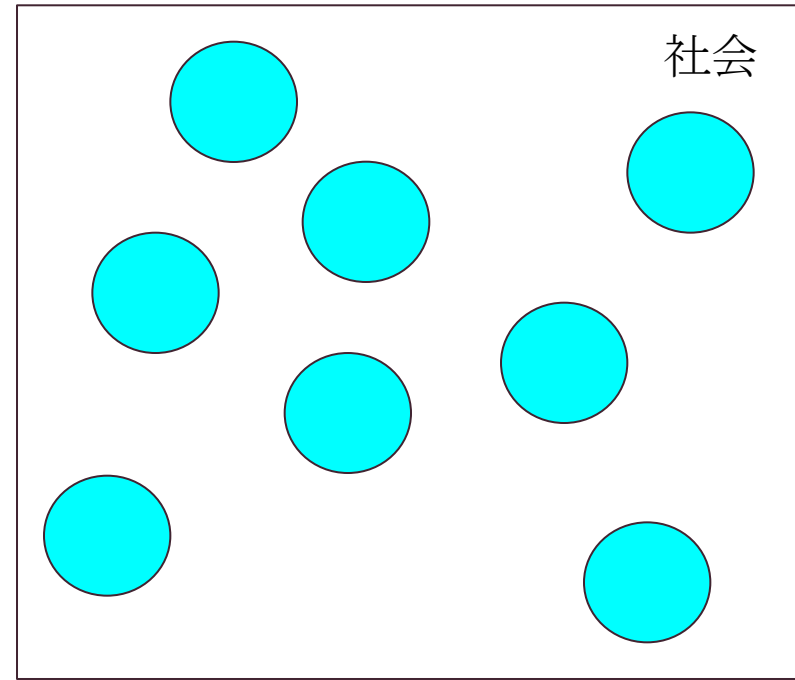
本来はこういう状況が望ましい



この発想では、地域づくりは進まない



ひきこもり




特定の専門職による支援

ひきこもりの相談支援の担当者が感じる苦悩

問題解決の責任を負わされる感じ（押し付けと排除）

- 相談窓口の周知を強化した
 - ⇒ 相談件数が増加してこれ以上抱えられない状況になった
- 関係機関によるネットワーク会議を開催した
 - ⇒ 一方的に関係機関から難しい事例を紹介される機会になった（こちらからつなごうとすると「うちはひきこもり支援機関ではない」）

「ひきこもり支援は担当者が責任を負うものだ」
そのために公的サービスがあるのだから
「自分とは関係ない」  排除

社会モデルによるひきこもり支援

⇒ 地域共生社会の実現に向けた「地域づくり」に取り組む

自己責任を求める社会

(ひきこもりは本人・家族の問題)

地域共生社会

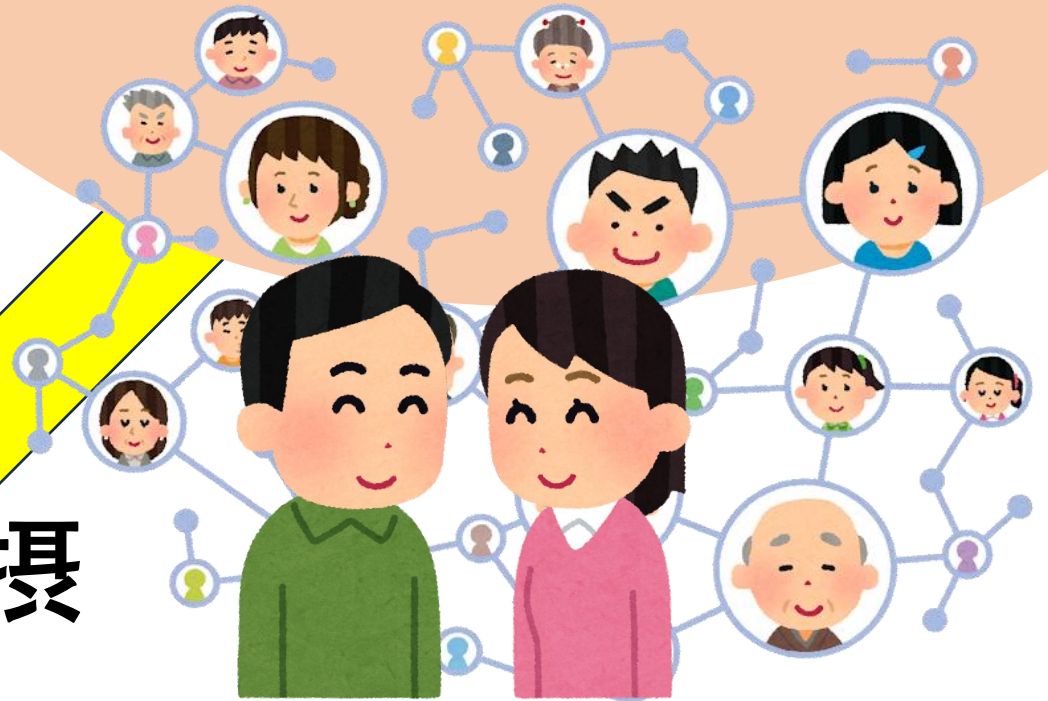
(支える・支えられる)

排除



問題
解決

包摂



ひきこもり

「人と人との関係」から生じる
居場所づくり

地域共生社会とは

◆制度・分野ごとの『縦割り』や「支え手」「受け手」という関係を超えて、地域住民や地域の多様な主体が『我が事』として参画し、人と人、人と資源が世代や分野を超えて『丸ごと』つながることで、**住民一人ひとりの暮らしと生きがい、地域をともに創っていく社会**

支え・支えられる関係の循環 ～誰もが役割と生きがいを持つ社会の醸成～

- ◇居場所づくり
- ◇社会とのつながり
- ◇多様性を尊重し包摂する地域文化



- ◇生きがいづくり
- ◇安心感ある暮らし
- ◇健康づくり、介護予防
- ◇ワークライフバランス

すべての人の生活の基盤としての地域

- ◇社会経済の担い手輩出
- ◇地域資源の有効活用、雇用創出等による経済価値の創出

地域における人と資源の循環 ～地域社会の持続的発展の実現～

- ◇就労や社会参加の場や機会の提供
- ◇多様な主体による、暮らしへの支援への参画

すべての社会・経済活動の基盤としての地域



農林



環境



産業



交通

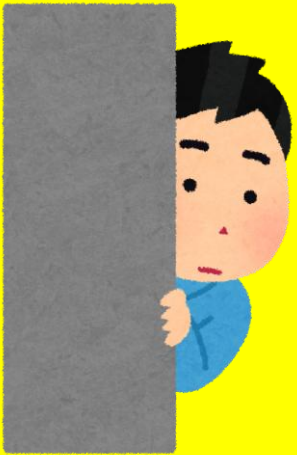
.....

ひきこもり支援に関する考え方の変化

	これまで	これから
支援施策の主体	都道府県・政令市	市町村
支援の担い手	専門職（特に精神保健福祉関係）	地域住民を含む 多様な主体
ひきこもりの捉え方・支援モデル	問題のあるケース（悩みのある本人と家族）・医学モデル	アドボカシーの対象（排除による孤独・孤立） ・社会モデル
支援の焦点・主な方法	個別の問題に対する治療や支援 問題解決型アプローチ	居場所（人・機会・場所）におけるケア 伴走型アプローチ
コミュニティ支援の焦点	早期発見・早期治療による予防	地域共生社会 の推進（社会的包摂）
ネットワーク・プラットフォームの形式	関係者による連携会議 専門性に応じた役割分担	誰でも参加できる場 多様な主体が出会い交流する場
支援の評価ポイント	ひきこもり問題が解決したか （受療、就労、自立したか）	地域に多様な居場所が増えたか 人々の繋がりが広がったか（孤独感から安心感へ）

地域づくりに取り組むためのヒント

「草の根ネット」のウラ側



(参考) ひきこもりの地域支援として地域づくりを展開するためのポイント：市町村プラットフォームに参加する多様な主体の語りから
岩田光宏 臨床精神医学 55(8) 印刷中, 2026.

阪南市の市町村プラットフォーム「草の根ネット」の意義

1. ひきこもり支援が「**社会全体で取り組む課題**」に
自治体によって呼びかけられ、そこに関心のある人は「**誰でも参加できる**」
⇒ 特定の担当者だけの課題ではなく社会全体で取り組む課題であるというメッセージの発信
(×公的サービスの担当部署のみが解決のために働く)
2. プラットフォーム自体が「**出会い交流の場**」(=居場所)に
問題解決の話し合いではなく交流の時間を中心にすることで、参加者が安心して出会える機会に
⇒ 参加者が相互にケアし合う(広い意味での**ピアサポート**関係)
3. 居場所づくりの協働による「**アドボカシーの視点**」の醸成
誰かが取り組む地域の居場所づくりの活動に対して、他の参加者が**できる限り協力しよう**とする
(×やる気のある人だけが、好き勝手に取り組めばよい)
⇒ 相談支援の利用者のみを対象にするのではなく、助けを求められない人を含む地域そのものに対して、多様な居場所を創っていかうとする意識の醸成(排除に対するアドボカシーとしての居場所づくり)

今後の課題はより広域なプラットフォームを構築・連携すること

関係者インタビュー（1）【50代男性 市役所職員（福祉職）】

「草の根ネット」を立ち上げたいきさつ

- **業務外に個人的に**ひきこもり支援者の集いに参加したときに、さまざまな立場の人が参加するネットワークの取り組みの発表を聞いた。そういう当事者、家族、行政、民間などいろんな立場の人が集まる場が阪南市にもあればと思った。阪南市には当時ひきこもり支援の社会資源がほとんどなかったので、まずそういう場を設けよう。
- （公民館でひきこもり講座が始まったのをきっかけに受講者を中心とした「草の根ネット」を立ち上げた。）講座の終了後に、集まった人たちの行き先をつくった。**とりあえずいろんな人に来てほしい、みんな言いたいこと言おうよみたいな感じで。**
- （「草の根ネット」のアドバイザーに講座の講師（※発表者）を呼んだ。）行政主導でやったら限界があるんですよ。行政がしたいからするんやろうって参加者が受け身になる。だから客観的な立場でコーディネートをする人がいる。**行政からの押し付けじゃなく、みんながそれぞれ当事者的な感覚になっているいろんな話ができる場**にしたかった。
- （なぜ「草の根ネット」を誰でも参加できる場にしたのか？）業務としては行政主導で関係者会議をやっておけば済んだのかもしれないけど、**福祉の専門職としてどうすればよい形ができるかを考えた**とき、地域課題に取り組むには、いろんな立場の人が課題を共有できる仲間になってどうしようかって考えていける場があると。自分がどうやったら仕事が楽しくなるか考えてそうした。

「草の根ネット」の意義として感じていること

- 「草の根ネット」を続けているなかで、関心を持って**集まった人たちが仲間を作れた**こと。結果的に。最初から意図したわけじゃないけど。単発の講座だけでは仲間づくりまでいかない。人によって関心は違うので、関心のある者同士がマッチングするには時間がかかる。だから人が集まるまでの時間とマッチングが起こるまでの**時間がどうしても必要**だったと思う。
- （「草の根ネット」を通じた自分自身の変化はあったか？）最初はひきこもり支援のみを考えていたが、**地域の居場所づくりが大切だ**という考えに変わっていった。ひきこもり支援ってそれだけに特化してもどうにもならへん。当事者の支援をしようっていうのは自分がしてあげるみたいな支援者の傲慢がある。人っていろんな関連性のなかで生きてるから、**どこにその人がつながるかはわかれへん**わけです。そのきっかけをどう増やしていくかって考えたときに、**地域に居場所を増やすことが重要**だと。
- 僕自身にも出会いがあって、よかった。**同じような思いの仲間と話ができたのはすごい嬉しかったし良かったこと**ですね。

関係者インタビュー（2）【60代男性 公民館の館長】

公民館でひきこもりの講座を始めたいきさつ

- 「ひきこもり」は地域の課題なので公民館として取り組んでいかないと、と考えて。自分の子どもの友人や妻の知り合いに、ひきこもり当事者や家族がいた。その話を聞いていて地域の課題だろうと。ひきこもりもいろんなケースがあって、たくさんの方がいるのに全然世間に知られてないし、支える側も少ない。もう少し当事者や家族を理解する環境があればと思っていた。
- （家族会が立ち上ったのは）何人かキーパーソンがつながってうまくできた。居場所づくりに必要なのは、やっぱり中心になる人とそれを仕向ける人。ただしそういう人が現れるには期間が必要。講座に人が集まっても単発的だと絶対に会にはならない。継続して参加者同士がコミュニケーションできる期間が必要。講座と関係なしに互いに気楽に話せる場を作ることも大切。そのなかで自分たちで続けようっていう雰囲気ができたら大丈夫。

「草の根ネット」の意義として感じていること

- 公民館によるひきこもり講座などの取り組みは全国的に珍しいようで問合せがあるが、他でもやってほしい。（講座だけでなく居場所づくりまで携わるには時間も労力もいるが）そこに効率性っていう認識はない。これは大事だと思う部分は支援する。平等や公平も大事だけど、この人たちには力を注いで、という見極めもある。その人たちと深い相互的なコミュニケーションを取ることもあっていい。「私はここまで」というわけにいかないことがある。大事なのは思いを持って仕事をする。よりよくしようって携わるからここまで来た。それがなければ前に進むことはない。今後は家族会と公民館とでできることを考えたい。せっかく公民館から生まれた会なので支援していきたいなど。

「草の根ネット」の関係者から学ぶ地域づくりのポイント

- 「人と人との関係」から居場所が創出される**
地域づくりの土台になるのは「人と人としての関係」。「草の根ネット」の参加者はそれぞれ重要な他者と出会っているが、それは問題解決のための支援者／利用者という一方的な関係ではなく、**個人的な要素の強い相互性のある関係**（広義のピアサポート関係）であった。安心してつながれる人との関係が網目のように広がるなかで居場所づくりが展開していった。
- 安心してつながれる人との関係には時間が必要**
「人と人との関係」としての仲間づくりは意図して出来るものではない。ある程度の期間が必要。誰でも参加できる場を**継続的に設けるなかで人と人が出会い、結果的に安心してつながれる人との関係を醸成**していった。
- 立場にこだわらずに力を注ぐ**
地域づくりを効率的に実現することはできない。もしプラットフォームの運営や講座の実施という業務を効率的に行っていたら、仲間づくりは生じず居場所づくりは展開していなかったかもしれない。**業務効率を求められる立場にこだわらず、自分の「思い」を大切に力を注いだ**ことで、地域づくりが進展した。
- 居場所づくりへの参加から個人の変化も生じる**
安心してつながれる他者との出会いは、ひきこもり本人・家族自身にも影響を与える。問題が解決しなくても孤立の解消、孤独感の緩和が生じ、自ら居場所づくりを担う側になる人も現れる。支援者自身も、業務上の関係に留まらず、人と人との関係から**個人としてケアされ変化を体験**することも。

地域づくりに取り組むためのヒント（私の体験から）

- 発表者（岩田）の阪南市との関わり
公民館のひきこもり講座：講師・コーディネーター（2019年度～） / 草の根ネット：アドバイザー（2020年度～） / 家族会・トリガーフェス：ほぼ毎回参加
- 講座では、専門家による一方的な講義ではなく、地域の人たちにひきこもり経験者・ご家族の体験談や地域の居場所活動の実際を聴いてもらう機会にする。参加者同士の交流が生じる時間を設ける。
（自分にもできることがあると感じられる・つながる場所があることを知る機会にする）
- 草の根ネットや家族会等では、専門家としての助言はできるだけ控える。いち参加者として自分自身の居場所になるように過ごす。（自分自身の子育て・介護の悩みなどを聞いてもらう）
- 人との出会いを大切にする。講座や会議の前後や休憩時間などのスキマ時間に、個別に話しかける。最初はあいさつ⇒またお会いしましたね⇒草の根ネット、家族会、講座などの他の機会に誘う（協力をお願いします）。（会議などの時間が「オモテ」で、前後や休憩などのスキマ時間が「ウラ」とすると、その「ウラ」の時間の方を大切にする）

市町村職員が地域づくりに取り組む意義


～地域づくりに業務として取り組む際の困難を踏まえて～

(参考) 伴走型支援をひきこもり支援の「業務」として実践するために：「ひきこもり支援ハンドブック」の意義と課題 (2)
岩田光宏 大阪経大論集 76(3) 33-49.2025.

「時間をかける関わり」が地域づくりの土台になる

〈時間をかけない関わり〉
できるだけ早く問題を解決するための関わり
(問題解決型支援において求められる)

〈時間をかける関わり〉
時間をかけることによって、より安心して過ごせる関係になる
(伴走型支援において求められる関係)

- 
- **人と人との関係**：同じ社会で暮らす仲間（ピア）としての出会い
 - **相互性**：「する／される」の立場が固定した関係ではない。自分もケアされる
 - **つながりの実感**：長く続けていると会っていない時間にも「つながり」を実感できる（⇒孤独ではない）
 - **つながりの拡がり**：安心して過ごせる人が安心して関わられる人は、自分にとっても安心できる人かもしれない。（⇒仲間が増える）

対人支援において今後求められるアプローチ

支援の“両輪”と考えられるアプローチ



具体的な課題解決を目指すアプローチ

- 本人が有する特定の課題を解決することを目指す
- それぞれの属性や課題に対応するための支援(現金・現物給付)を重視することが多い
- 本人の抱える課題や必要な対応が明らかな場合には、特に有効

つながり続けることを目指すアプローチ

- 本人と支援者が継続的につながることを目指す
- 暮らし全体と人生の時間軸をとらえ、本人と支援者が継続的につながり関わるための相談支援(手続的給付)を重視
- 生きづらさの背景が明らかでない場合や、8050問題など課題が複合化した場合、ライフステージの変化に応じた柔軟な支援が必要な場合に、特に有効

共通の基盤

本人を中心として、“伴走”する意識

個人が自律的な生活を継続できるよう、本人の意向や取り巻く状況に合わせ、2つのアプローチを組み合わせることが必要。

伴走型
支援

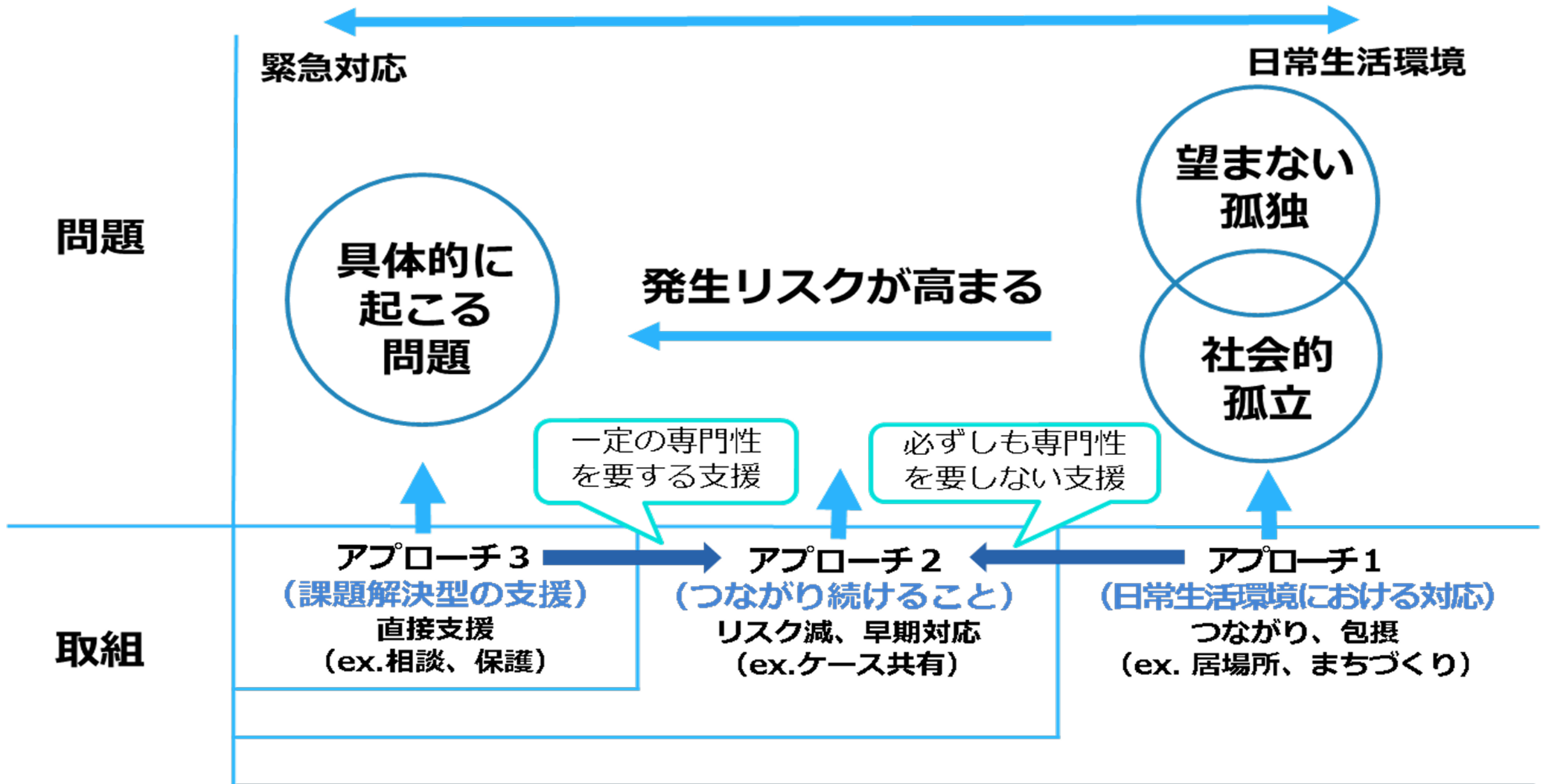
伴走型支援を業務として行う際の困難

問題解決型支援の特徴	伴走型支援の特徴	伴走型支援を業務として行う際の困難
支援で発揮することが 求められるのは専門性 であるため、支援者の個性の発揮など属人的な関わりは望ましくない	「人と人としての関わり」が本質であるため、 属人的な関わりと相互性を重視 する	属人的な業務は人員配置や引継ぎなどにおいて業務管理のバランスを崩すノイズとみなされ、 <u>批判の対象</u> となる
専門性を活かして、 効率的に実行 されることが望ましいという価値を含む	安心して過ごせる関係性の構築を目的とするため、 時間をかけることに価値が置かれる	自治体のサービスに求められる価値は徹底的な無駄の削除であるため、あえて時間をかけるような業務には <u>圧力が向けられる</u>
支援対象者からの要望によって開始され、その問題を解決したときに業務としての支援が終結する	アドボカシーの視点に基づき、支援者の側から関わりを持ち、関係を継続しようとする こともある	問題解決型支援と比べて伴走型支援を実践する根拠があいまいであるため、 <u>優先順位が相対的に低くなる</u>

(参考) 伴走型支援をひきこもり支援の「業務」として実践するために：「ひきこもり支援ハンドブック」の意義と課題 (2)
岩田光宏 大阪経大論集 76(3) 33-49.2025.

「孤独・孤立」問題とアプローチ

出典：内閣府 2022 孤独・孤立対策官民連携プラットフォーム分科会2 「きめ細やかな支援や地域における包括的支援に向けた行政（国、地方）・民間・NPO等の役割の在り方」中間整理



【相談支援】

- ひきこもりの相談窓口を設置して利用を促す（早期発見・早期支援）
- 支援者の連携体制を構築するためのネットワークを作る
- 専門職が「支援をする」／ひきこもりの本人・家族が「支援される」

【居場所づくり】

- 本人・家族が安心して過ごせる時間や安心して繋がることのできる人・機会・場所を創る
- 支援者が創る居場所もあれば当事者が創る居場所もある
- 参加者が相互に支え合うピアサポートが生じる

【地域づくり】

- 地域課題に対する取り組みに地域住民（多様な主体）が積極的に参加する仕組みを創る
（地域のなかに安心して過ごせる居場所を増やしていく・居場所づくりに参加する人を増やしていく）
- **焦点は地域そのもの** ⇒ 地域共生社会の実現
（ひきこもり本人・家族および支援者だけでなく、さまざまな地域住民とのつながり）
- そのために**多様な主体**が参加してつながることができる場（プラットフォーム）が必要

公的サービスと私的なサービス それぞれの苦勞（私の体験から）

自治体職員立場として

- ◆ 「公的な」の相談窓口「赤信号」の人たちが次々とやって来る
- ◆ 断ることができない
- ◆ しかし人手不足で、丁寧な相談支援ができない
- ◆ 「地域づくり」がおろそかに
- ◆ 「自治体任せ」の状況に対して、地域もがんばってくれよ、という思い
- ◆ 地域活動につなごうとしてもつながらない
- ◆ 地域活動が自己満足の取組みに見える
⇒ 公に責任を求めるならもっと人員を！地域で対応するなら受け入れを！

地域活動に取り組む立場として

- ◆ 「私的な」活動としての取り組み。自分自身と自分の周りの人のために始めた
- ◆ 個人的なつながりから活動が広がっていく
- ◆ いろいろな人が来てリクエストも多くなる
- ◆ しかしリソースが足りず、応えられない
- ◆ ヨソとつながる余裕がない（理由がない）
- ◆ 自治体から難しい人を紹介されたり過剰な期待をかけられるのはやりの搾取だ
- ◆ 自治体につなごうとしてもつながらない
- ◆ 自治体が公的サービスとしての責任を果たしていないように思える
⇒ こっちはあくまでボランティア活動、そっちは公的サービスとしての仕事なのに！

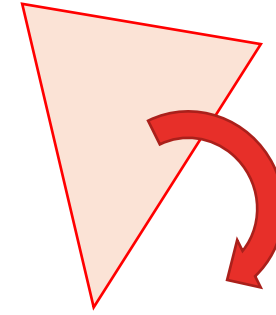
なぜこのような苦勞を感じたのか（どうすればいいのか）

本来のバランスが崩れてしまっている

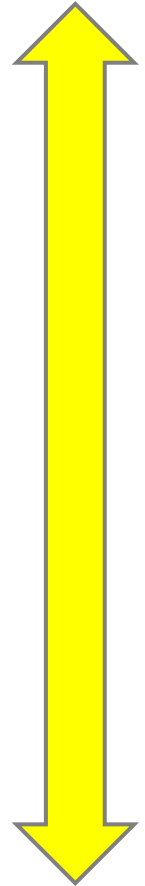
【相談支援】

本来のひきこもり支援の
バランス

【対人援助職
の専門性】



現状は土台が弱く
不安定！



問題解決型
支援

伴走型支援

地域の居場所づくり

【地域づくり】

- 公的サービスとしての相談支援のなかで伴走型支援も求められる
- 担当支援者の負担の増加
- 業務として誰が何をどこまでやればよいのかわからない状況

- 活動する人が少ない（あっても小規模だったりなくなったりしまったり）
- 個人の負担が大きい
- 広げられない・続けられない

地域づくりを地域支援体制の中心に置く

【公】 public

- 伴走型支援にも取り組める体制づくり
- 地域の支援体制のあり方を主体的に考える
 - × すべて委託してしまう

【共】 common

- 多様な主体がプラットフォームを創り、開かれた対話ができる場にする
- そこから居場所づくりが発生する

【私】 private

- 活動を始めた動機（自分や身近な人のため等）を大切にして、無理をしすぎない
 - × 誰かのために自分を犠牲にする

（参加する際のポイント）

- プラットフォームの「旗振り」をする
- 行政という立場にこだわると垂直的な関係になるので、個人として参加する意識も大切にする
- 効率性などの基準を持ち込まない
- （業務外に）住民のひとりとして参加する
- 参加者同士が労い合う場になるよう工夫する
 - × 一方的、押し付け合い、マウント合戦
- 継続する（時間をかける）
- 場のあり方についても話し合う（分科会を創るなど、やり方を柔軟に変える）
- 細々と長く続ける（時間をかける）
- 地域全体の居心地がよくなっていくこと（地域共生社会の実現）を少しだけ意識する
- やがて多くの人にとって価値のある活動になる
- そのためには、プラットフォームで参加者と労い合う時間を大切にする（継続的に参加する）

□ Q 「草の根ネット」のやり方をすれば、阪南市と同じように地域づくりが進みますか？

□ A もちろん他の地域でも同じようなプラットフォームや講座を実施すると、地域づくりが展開するかもしれませんが。しかし時間や労力をかけたとしても、「人と人との関係」や居場所づくりが生じないかもしれません。

「人と人との関係」は属人的な要素が大きいため、**ノウハウを一般化することはとても難しい**のです。第三者が意図的に仲間づくりを実現できるものではないからこそ、**「時間という要素」が必要**なのです。

種を蒔かなければ芽は出ません。地域づくりに取り組むには、種を蒔いた上で待つ姿勢が求められます。

□ Q ひきこもりには困難事例が多いので、非専門家による居場所支援が役に立つ人は少ないと思います。そこまで時間や労力をかける意義はあるのでしょうか？

□ A ひきこもり支援には、専門的なアセスメントと技法に基づく専門職による相談支援も必要です。しかしすべてのひきこもりは問題であるとの認識のもと、解決への支援を専門家が担わなければならない、としてみまると、**支援担当者は追い込まれ、疲弊してしまいます。**（押し付けと排除）

問題解決型支援の対象は支援の利用者に限られるため、地域そのものを変化させることはできません。**地域づくりは、相談支援に取り組むための土台にもなります。**早急に、**地域づくりにも**取り組むことが必要です（相談支援と地域づくりのどちらも大切です）。

□ Q 地域づくりに取り組み、地域の居場所ができましたが、参加者はわずかです。費用対効果が悪すぎませんか？

□ A 居場所などで相互性のある人間関係が生じれば、参加者は自分が助けてもらっただけでなく「支援をする側」になることもあります。両方の関係を経験すれば、地域共生社会の意義を実感して、**つながりを広げていく活動に取り組むかもしれません**。それは自分の問題だけでなく、社会全体の課題に対して実践を行うことです。つまりひきこもりの人々に対する**アドボカシーの主体に変容**することです。それがたとえ1人だったとしても、その人の活動は、別の誰かの新しい実践を創出するかもしれません。

こうした地域づくりの成果は、問題解決型支援の効果とは異なりますので、同じように評価することはできないのです。

□ Q ひきこもり支援の担当者の多くは相談業務で忙しく、地域づくりに時間や労力をかけることは難しいのが現状です。地域づくりは誰が取り組めばよいのでしょうか？

□ A 確かに公的サービスの業務として伴走型支援や地域づくりに取り組むには多くの困難が存在します。「思い」を大切にしておいて業務に時間と労力をかけることは簡単ではありません。

しかしそもそも地域づくりは担当者のみが業務として責任を負うことができるものではなく、**すべての人が少しずつ力を出し合って取り組むべき**ものです。したがって忙しくて成果を出せないからとあきらめるのではなく、**市町村プラットフォームで土台を整えておく**ことが重要です（ただし市町村プラットフォームの業務の担当については、必ずしも相談支援を担う専門職が行う必要はありません）。

また、たとえば**地域住民のひとりとして生活者の立場からできることを少しだけでも続けていく**ことも大切です。

□ Q 地域づくりが重要なのはわかりました。業務としては難しいので、地域住民のひとりとして、個人的に始められることは何でしょうか？

□ A ひきこもりの地域づくりは、地域共生社会の実現に寄与します。逆に言えば、地域共生社会を推進する活動によって、ひきこもりを排除しない地域に近づけられると考えることもできます。

したがって、ひきこもり支援に限らず、**身近な地域のさまざまなきっかけを活かして、個人的なつながりを広げる**ことも大切です。たとえば、「**孤独・孤立対策**」としての地域づくりの取り組みも参考になります。少しだけでも、自分にできることを無理せず続けていくことが大切です。

孤独・孤立対策に関するモデル調査

https://www.cao.go.jp/kodoku_koritsu/torikumi/modelchousa.html

孤独・孤立対策に資する官民・民民連携による特色ある取組

<https://www.notalone-cao.go.jp/platform/promotion/>



まとめ ひきこもり支援の地域づくりとは

- ひきこもりなどの「孤独・孤立」の問題では、**本人・家族から援助を要請することが難しい**。社会のなかで声を上げられない人々≡生きづらさを抱えているのに社会から排除されている人々であると捉える。
- そのような人々が**安心して過ごせる環境を社会の側が創る**。たとえば、さまざまなタイプの地域の居場所を増やす。（人と関わるのはあくまで個人の自由だが、身近に安心して関われる人や安心して過ごせる場所がある状況（地域社会）を創ることは社会の側が取り組むべきこと）
- そのために**多様な主体が参加できる市町村プラットフォーム**を創る
- ここでは、それぞれの立場にこだわり過ぎず、**人と人としての相互的な関わりに時間をかける**。その結果、居場所づくりが生じるかもしれない

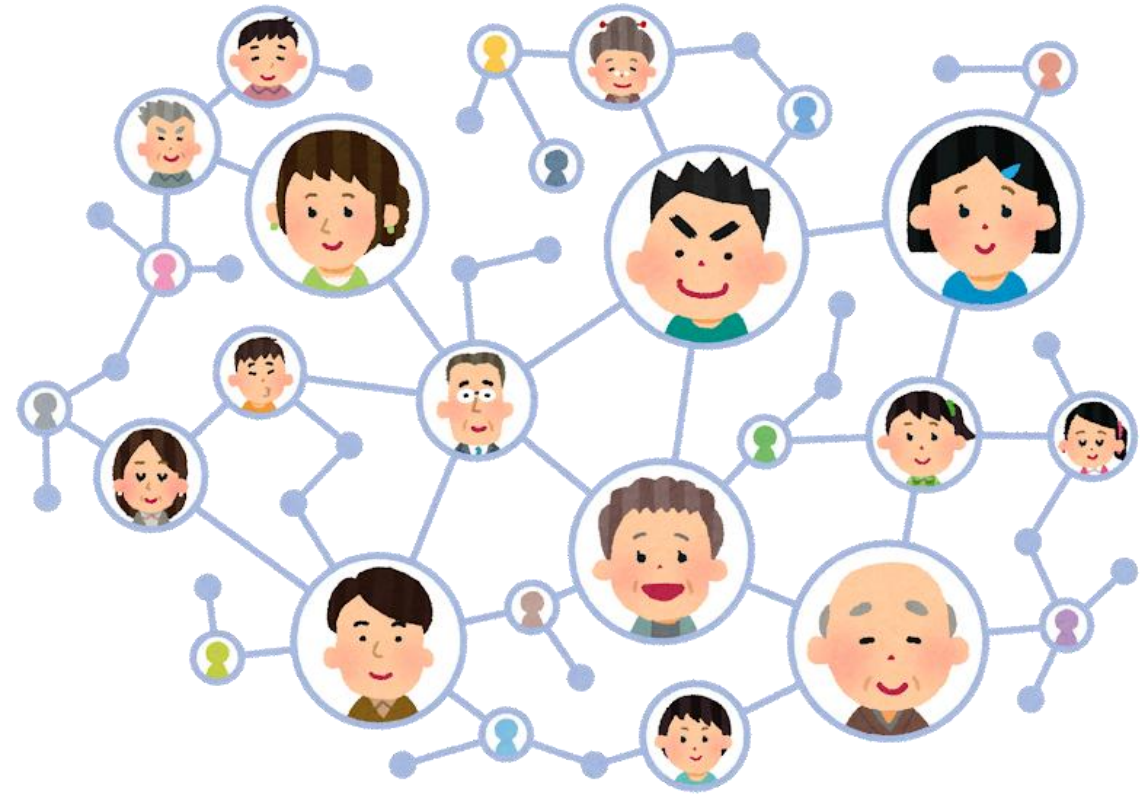
ひきこもりは社会の課題 ⇒ みんなで取り組む ⇒ 地域共生社会の推進
（そのためには自治体が旗振りをして、地域づくりにも取り組む）

今後に向けて

- 地域づくりか相談支援か、ではなく、相談支援を支える基盤として地域づくりが必要である
- ひきこもり支援における地域づくりは、地域福祉推進・重層的支援体制整備・地域共生社会の推進という自治体の責務になかに位置づけられる
- 誰でも参加できる市町村プラットフォームが重要。ただし、誰でも参加できる場を維持し続ける「人」の存在が重要である
- 明確な地域活動の展開までは、5～6年かかると考える
- 地域づくりの成果指標の例として、新たな活動の創出数、参加主体数、主体間の協働事例数、地域活動への参加者数などを用いるのはどうか

**【専門的な相談支援】と【地域づくり】の両輪によって
ひきこもり支援の基盤となる地域共生社会を実現していく**

「孤独・孤立」時代のひきこもり支援



いろいろな人がいてもよい・いろいろな人がいたほうがよい
というコミュニティ（共生社会）を創る